

事業2 研究・臨床実習期間中の海外渡航支援

番号	氏名	渡航先	国・地域	渡航先での受入期間
1	S・K	UAE大学	UAE	2024/5/1～2024/5/22
2	M・Y	UAE大学	UAE	2024/4/8～2024/4/26
3	N・M	UAE大学	UAE	2024/4/8～2024/4/26

令和6年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部医学科	6年	学籍番号：*****	氏名：S・K
--------	----	------------	--------

渡航先国：UAE
受入機関名：UAE 大学（Al Ain Hospital）
渡航先機関での受入期間： 令和 6年 5月 1日 ～ 令和 6年 5月 22日（ 22日間）

【実習スケジュール】

5月1日～5月22日 精神科

月 AM：回診

PM：カンファレンス

火 AM：回診

PM：外来

水 AM：回診

PM：コミュニティ

木 AM：回診

PM：ECT

金 AM：回診

PM：休み（礼拝のため）

【実習の目的】

本実習は、国際的な医療環境での医療の実践を体験し、異文化コミュニケーションの重要性を学ぶことを目的としていました。異なる文化背景を持つ患者さんに適切な医療を提供するためには、その文化を理解し、尊重することが不可欠です。UAEにはアラブ諸国や南アジアをはじめとする様々な国からの労働者が来ています。この実習では、UAEの多様な文化的背景を持つ患者さんと接することで、文化的な違いについての理解を深めることを目指しました。

また、精神医学の最新の治療法や診断技術についての知識を深めることも目的でした。世界各国での医療標準やプロトコルは異なりますが、国際的な基準を理解し、それに準じた医療を提供する能力は、グローバルな医療人として必要なスキルです。Al Ain 病院での実習を通じて、国際的な医療標準に基づいた医療の実践を学びました。

【実習内容】

実習では、患者さんの診察や治療に同席し、精神疾患の診断プロセスや治療法について学びました。また、多文化背景を持つ患者さんへのアプローチ方法や、言語の壁を越えたコミュニケーション技術についても実践的な経験を積むことができました。

実習の初期段階では、患者さんの診察や治療のプロセスを観察しました。医師や他の医療スタッフが行う診断面接や治療計画の立案過程を学び、精神医学の基本的なアプローチを理解しました。また、定期的に行われる精神科のカンファレンスに参加し、複合的な疾患を抱える患者さんのケアや家族に対する説明について学びました。

実習の後半には、指導医の監督のもと、英語の話せる患者さんとの面接を行いました。患者さんの話を聞き、症状の評価を行うことで、臨床スキルを実践的に向上させました。

UAE の文化に適応することも実習の重要な部分でした。日本とは大きく異なるアラビア文化の中でのコミュニケーションや、宗教的・社会的背景を考慮した患者ケアの方法を学びました。

【実習の成果】

実習を通じて、精神科の実際の臨床現場での経験を積むことができました。臨床スキルを大幅に向上したと思います。患者さんとの面接や診察において、適切な質問技術や臨床判断力を磨くことができました。特に、異文化の患者さんとのコミュニケーションにおいて、適切なアプローチを取ることができるようになりました。

UAE の Al Ain 病院での実習は、異なる文化的背景を持つ患者さんとのコミュニケーションにおいて、大きな学びを得ました。言語の壁を越えて患者さんと信頼関係を築くには笑顔と挨拶が最も重要な要素であると学びました。

また、この実習を通じて、国際的な医療の現場における問題や課題を理解し、それに対する適切な対応策を考える視点を養いました。異なる文化や医療システムに触れることで、より広い視野を持つ医師になることができました。

【今後の抱負】

日本では今後、様々な文化的背景を抱えた人々が増えていくと予想されます。今回の実習経験を基に、そのような方々を支えられる医師として、さらに専門性を高めていきたいと考えています。また、異文化に対する理解やコミュニケーション能力をさらに磨き、国際的な医療協力に貢献できるよう努めていきます。

【謝辞】

Dr. Mohammed をはじめとする Al Ain 病院のスタッフの皆様には、温かい歓迎と貴重な指導を賜り、深く感謝申し上げます。また、岸本忠三先生には、この度の海外病院実習のご

支援をいただき、心から感謝しております。今後とも、ご指導いただいたことを生かし、医学の道を精進して参ります。

令和6年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部医学科 6 年	学籍番号：*****	氏名：M・Y
------------	------------	--------

渡航先国：UAE
受入機関名：Tawam Hospital
渡航先機関での受入期間： 令和6年4月8日 ～ 令和6年4月26日（19日間）

今回、大阪大学の岸本国際交流奨学金の支援を受け、UAE 大学 Tawam 病院での海外実習を行った。3週間の中でラマダン明けの休暇がかぶるなどして短い期間ではあったが、医療の面はもちろん、他の様々な面でも貴重な経験を積むことができたので関係者の方々に感謝を表し、今回の実習での経験を報告したい。

1. 本実習の目的

今回の実習での目的は大きく二つで、イスラム教の文化を肌で体感したり、異文化での医療に直接触れること、医学的知識と医学英語をより理解することだった。まず1つ目については、UAE を留学先に選んだ理由が多国籍国家であることと、イスラム教の影響を強く受けていることが医療にどのように影響しているのかを知りたかったからであった。また、たまたま留学に行った期間がちょうどラマダンとラマダン終わりの時期であり、実際の生活を目の当たりにしたり、病院のスケジュールが変則的であったりとかかなりイスラム教についての理解が進んだと考えている。二つ目については医学知識を英語で学ぶことで、医学英語を理解して使う機会が増えるのに加えて、日本とはまた違った見方を取り入れられると考えた。日本では医学を日本語で習うが、他の多くの国では英語で習うということもあって、英語が日常的に使われる海外での医療を経験できた時間はとても有意義だった。

2. スケジュールと実習内容

あまりにイレギュラーなことが多い実習だった。

朝が早い文化だからか7:30から15:00が基本的な実習時間という感じでした。

一週目 ラマダン中&ラマダン明け大祭期間

前半二日はラマダン中、後半3日はラマダン明け大祭とかぶっていたので少しスケジュール

ルがゆったりしていた。

前半二日は整形外科に行った。

整形外科の先生は毎日一人だけで入院患者さんの回診について回った。

ラマダン期間中は人目に触れる場所で水を飲んだり、物を食べてはいけないので、水を飲まずの実習がきつかった。

患者さんと先生はほとんどがアラビア語の会話だったので先生の説明なしには理解はできなかった。ヒンディー語しか話せない患者さんが来た時などは話せるスタッフを呼んできて通訳してもらっていた。

後半3日は救急の実習に参加し、初期対応を見ることができた。英語で問診するように指示されが、たまたまアラビア語しか話せない患者さんが来ていて、問診することはなく終わった。基礎的な英単語を教えてくれたのですごくためになった。

先生方はとても親切だったが、英語を聞き取るのに苦労したのでコミュニケーションがうまく取れないことも多く申し訳なさを感じることも多い1週間だった。

二週目 洪水で月曜日のみ実習

二週目は整形外科でレジデントの先生方と一緒に行動することが多かった。月曜日はオペ見学で PRP 療法を行う様子や大腿骨のプレート固定の修正などを見た。患者さんが痛みに耐えるシーンが日本に比べて多いように感じた。また、手術も力業のところも多かった。かなり太っている人の割合が多かった。

火曜日からなのだがドバイの二年分の降水量が 12 時間で降り注いで、洪水の為実習が亡くなった。道路がほぼ川になっていて、日本では少しひどい雨くらいの降水量でもこちらでは災害になってしまうことに驚いた。窓から雨がたくさん入ってきて部屋が水浸しになったり、停電や断水を経験し、建物が雨に対応していないことがよくわかった。この期間はバディの実家で過ごした。

三週目 整形外科で実習

三週目だけまともな実習ができた。毎日朝 7 時半のカンファレンスに参加して、その日の手術の予習をみんなでした。かなりディスカッションを盛んにしていたのが印象的だったのと、時間にルーズなのかと思いきや 7 時 25 分にはみんなほぼ来ていてむしろ早く始めることもあって驚いた。(アルコールがないからこの時間に全員来れるのかなと勝手に思っていました。) 回診の後には月曜日は手術見学、火曜日は外来見学、水曜日本曜日は回診の見学を行った。

手術見学では股関節骨折に対する後方アプローチや大腿骨骨折などを見た。基本的には日本との差異は大きく感じなかったが、日本より頻繁に PRP 注射を行っていた印象を受けた。また、日本では三人でする手術を二人ですていたりしていた。

外来見学では大きい病院ということもあってかフォローアップが多かった。患者さんはア

ルアインではやはりアラブ人が多いのでアラビア語での会話が多く、正直わからないことの方が多かった。こちらでは法定速度が日本より早いので、交通事故にあうとひどい目に合うことはわかった。また、一人で診察にくる人は一人もいなかったことが印象的だった。大人でも家族や友人の付き添いがいて、常に支えあう文化が垣間見えた。特に女性の患者さんに関しては必ず付きそいが二人以上いたのでかなり女性を尊重する文化なのが見て取れた。(これは普通に生活しているだけでも痛いほどわかりました。)

回診では先生について回ったが、正直これもアラビア語での会話が多くの病棟の様子や文化を知るにはよかったが、すべてを理解するのは難しかった。しかし、医者同士の会話は英語、患者さんと家族の会話はアラビア語という感じで、使い分けていて、センシティブな内容も英語で話すことでその場で方針が決まっていたりして、二言語を自由に使いこなせるのはとても良いと思った。

3. 成果

最初に記載した二つの目標について少しずつ書いていきたいと思う。

まず一つ目の目標はイスラム教の文化を肌で体感したり、異文化での医療に直接触れること、この目標は十分に達成することができたと思う。まず生活面においてイスラムの影響を直接受けたのでとても刺激的な日々だった。電車では女性と男性で座るエリアが分かれていたり、日の出前にホテルのすぐそばのモスクで礼拝が行われて、その音で毎日日の出に起きたりした。さらに、男性は女性を守るべきという考え方が根底にあり、男性はみなすごく優しくかった。女性は家族以外に髪の毛や踊っている姿を見せないという考え方なので、夜になるとカーテンをしめて過ごしたり、明るいところで踊っていても男性が来たら電気を消すように言われた(そもそも現地の子としない時以外全く踊らないので気にしなくて大丈夫でした。) また医療についても、ラマダン期間は病院にほとんど医療従事者がいない中、日が出ている間は水も飲まず、食事もとらず、交代で患者さんを回診したりしている姿を見ることができた。また、イスラム教の影響なのか、人が皆とても献身的で優しくて感動した。医療の技術面ではあまり日本との大きな相違はないと感じたが、女性医師の割合が多いこと、医者になるまでにかなりふるいにかけられているので優秀な人しか残らないことが特に印象的だった。6年生のバディの学年は100人入学しても卒業するのは67人で、そのうち男性は15人だけだと言っていた。医者という職業は勉強が大変すぎて男性には人気が高いわけではないと言っていた。また制度にも少し違いがあって、いわゆる初期研修が一年だけで後期研修が4年あるそうだ。後期研修の先生方と関わることも多かったが、皆カリキュラムにそってローテーションされており、日本のように後期研修からは一つの科に専念するわけではなさそうだった。(科は決まっていて、救急医のカリキュラムに2週間整形外科があったり、Family Medicineの中に8週間整形外科ローテがあるような感じ) また他の違いとしては、病院内でもマスクをしなくて良いこと(マスクをしたら体調が悪いのかと聞かれる)、回診の際に男性医師が女性患者の部屋に入る際に毎回

許可を取らなければならないことなどがあった。またヘナタトゥーをして手術や診察をしている女医さんが多く、ヘナタトゥーは病院でも OK だった。手術室では整形外科ということもあってかなりアグレッシブな先生が多くて、暇つぶし？に手袋を飛ばしてくる先生などもいて少し驚いた。朝のカンファレンスはみんなで nice day ! と叫んで終わる毎日でかなり朝から元気だった。日本とは朝の空気感が全然違った。院内ではお茶が常に配られていたり、本格的なコーヒーやチャイが飲める機械がたくさんあってご機嫌に過ごせる理由の一つなのかなと思った。

少しお金と時間はかかるが休日にはドバイやアブダビにもいけたのでかなり楽しかった。二つ目の目標に関しては、十分に達成できたとは言えないが、今後につながる経験ができたと思う。日本ですべての医療知識を日本語で学んでいるというのは世界のスタンダードからはかなり逸脱しているということに気づかされた。UAE では医学だけでなく化学や物理などアラビア語（日本でいう国語）以外の教科はすべて英語で学んでいるとのことだったのでもちろん皆が英語を流ちょうに話していた。整形外科がかなり専門に偏った科ということもあり、まず骨の名前を識別するところから難しかった。内科的は話の方がまだ医学英語がわかったので救急を見ているときなどは勉強になることも多かった。整形外科ではかなり理解が難しかったが、先生方がネット検索や絵を使って説明してくれたりして本当に親切で助かった。また、UAE では患者さんとの話し方の授業がたくさんあったり、試験がペーパーでなく実技だったり、卒試も実際に患者さんに診察をするテストだったり、かなり臨床でのコミュニケーション能力が重視されていることも分かった。動画を見るかお互いで模擬患者になったりして試験の勉強をするみたいで、本で勉強したことはないと言っていたので、勉強法もかなり違うと感じた。現地の子は知識は日本の学生の方がすごくあると思うけどカルテを書いたり、実際に患者さんを診る機会は UAE の学生の方が多いと思うと言っていたのが印象に残っている。また、先生方の説明も事実を並べるかんじの先生は一人もいなくて、どの先生も絵や表を書いてくれて説明をしてくれたので、かなりシンプルに知識を整理して医療を行っている感じだった。

4. 今後の抱負

今回は医学的な面でも、生活や文化的な面でも本当に色々な経験をさせていただいた。特に実習を通して医学的知識がまだまだ足りないこと、医学英語の能力が低すぎることを痛感した。これから日々勉強できる環境に感謝して医学知識を深めたり、医療英語を勉強したりして、また留学をしたいと思った。UAE の人達はずっとここに残りなよといってくれる人がたくさんいて、本当に温かい場所だったので、もっと成長してからまた必ず来たいと思った。また、文化的な面ではラマダン期間の生活を体験したり、UAE では 75 年ぶりの洪水を体験したりと、初めての経験も多かった。洪水で実習がない期間は UAE 大学医学

部 6 年生の女の子のアブダビに実家に泊めてもらって彼女の家族と本当に素敵な時間を過ごした。全く異なる文化を少しでも知れたとはこれからも色々な背景の国や人たちに会って行く中できっと役に立つと思う。

5. 謝辞

最後にこのような貴重な経験をさせてくださった全ての方々に感謝申し上げます。**Tawam** 病院で面倒を見てくださった整形外科の先生方、日本でプログラムを提供してくださった教育センターの先生方、職員の方々、そして奨学金を支援してくださった岸本先生に感謝申し上げます。ありがとうございました。

令和6年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部医学科	6 年	学籍番号：*****	氏名：N・M
--------	-----	------------	--------

渡航先国：UAE
受入機関名：UAE 大学 (Tawam Hospital)
渡航先機関での受入期間： 令和 6 年 4 月 8 日 ～ 令和 6 年 4 月 26 日 (19 日間)

【実習の目的】

日本は高齢者が多く外国人が少ない一方、UAE は若年移民の多い多民族国家であり、両者の医療制度の相違点について知りたいと考えた。また、ムスリムの方々と交流して彼らの価値観や文化などの社会的背景が医療にどのような影響を及ぼしているかを学びたいと思い UAE での実習を希望した。

診療科選定に関しては内分泌内科を志望しているため、当初は内分泌内科にて3週間実習をさせていただく予定だった。しかし、1週目はラマダン、ラマダン明けの祝日とかぶっていたため内科の病棟、外来が閉鎖されていた。その結果、1週目は整形外科、2・3週目は内分泌内科で実習をさせていただくことになった。

【実習のスケジュール】

・1週目（整形外科）

月曜：オリエンテーション

火曜：回診

水曜：自習

木曜：ERにてレクチャー

金曜：自習

・2週目（内分泌内科）

月曜：外来見学

火曜～金曜：自習（大雨、洪水のため）

・3週目（内分泌内科）

月曜～水曜、金曜：外来見学

木曜：カンファレンス、論文抄読会、回診

【実習内容】

外来見学では患者さんと医師はアラビア語で会話することが多かったものの、合間に医師が英語で病気の状態や治療に関する説明を英語でして下さった。ER では医師とともに主訴から鑑別疾患を挙げて、患者さんに問診を取りに行った。

【実習の成果】

内分泌内科の外来で特に多かった疾患は Vitamin D deficiency、Obesity、Diabetes Mellitus だった。UAE ではイスラム教徒が多く、アバヤとヒジャブで目以外の全身を覆っている女性が多く、肌に日光を浴びることが極度に少ないため、また、屋外にいる時間が少ないため Vitamin D が欠乏傾向にあった。そして暑い気候のため移動は車やタクシーが多く、運動不足になりやすいので Obesity、Diabetes Mellitus の患者さんが多い印象を受けた。電話での診察 (tell medicine) が日本よりも普及しており、家族による代理受診でも薬の処方ができるため、半年以上患者本人受診して血液検査をすることがない場合があり問題視されている。

UAE と日本では医療の質はあまり変わらない印象だったが、医療保険制度の観点から見ると大きく異なる。Emirati は医療費負担がなく全ての治療を制限なく受けることができるが Emirati 以外の移民などは各自医療保険に加入する必要がある、加入する保険によって保険によってカバーされていない薬が存在する。糖尿病患者に GLP-1 受容体作動薬を導入することを検討していても、保険によってカバーされておらず自費となるため他の治療薬に変更した症例もあった。その点日本は国民皆保険制度をとっており、標準治療を受ける機会が等しくあるのは良いと思った。一方で、アブダビ首長国の全ての病院で同じ医療情報システムが使われており、カルテの共有がされていた。これは日本よりも進んでいる点だと言えるであろう。

【今後の抱負】

移民大国の UAE での実習は非常に貴重な経験となった。医師、看護師、警備員など全ての職種の方々が歓迎して話しかけてくださり、恵まれた環境で充実した実習を行うことができた。また、同学年の医学生と交流する機会があり、医学に対する意識の違いや自分の英語力の無さを痛感し、不甲斐ない思いをすることが多かった。今後この悔しい思いを忘れることなく、今まで以上に医学、英語に対して真摯に取り組んでいこうと思った。

最後になりましたが、本実習を支援してくださった岸本先生および岸本国際交流奨学金制度に関わる先生方、本実習を整えてくださった医学部教育センターの皆様、実習でお世話になった Tawam 病院の方々に深く御礼申し上げます。